障害者スポーツによる儀礼的関心の構築

――1970年代の「運動」とパラリンピックの表象――

渡　　正

1　はじめに

日本において障害者のスポーツ[(1)]が本格的に始まったのは、1964年に行われた東京パラリンピック大会以降である[(2)]。パラリンピックの前身である国際ストーク・マンデビル車椅子競技大会は、1960年のローマ大会以降、オリンピック開催年はオリンピック開催国で行うことを決定していた。1964年に東京でオリンピックを開催することが決定していた日本は、障害者がスポーツをする環境が整備されていなかったにもかかわらず、東京で国際的な競技会を開催することになったのだった。

障害者スポーツが社会的に認知されたといえるのは、1996年のアトランタ夏季パラリンピックと、1998年の長野冬季パラリンピック以降であろう。また、ベストセラーとなった乙武洋匡の『五体不満足』が発売されたのが1998年10月であり、1999年11月には、『スラムダンク』の著者である井上雄彦が、車椅子バスケットボールを題材とした漫画『リアル』の連載をはじめており現在も人気を博している。少なくとも、日本において「障害者スポーツ」という営みが社会的な関心を獲得しはじめたのが、この時期であったといえる。

こうしたなかで、障害者スポーツに関しては、スポーツとノーマライゼーション、スポーツとクオリティ・オブ・ライフとの関係を中心に議論がなされてきた。それはたとえば、障害者スポーツの振興が、社会のバリアフリー化、健常者の障害者に対する「理解」の促進、障害者自身のクオリティ・オブ・ライフの向上につながるとする議論である。高橋明は「スポーツを見ることから、障害への関心、理解へ導かれます」（高橋 2004：184）と述べ、障害者のスポーツが「テレビや新聞等を通じて多くの人の目にふれるようになってきたことは、障害者への理解、ノーマライゼーション社会の実現に向けての前進」（高橋 2004：187-8）であるという。ここにはスポーツに参加する障害者やそれをみる人びとの増加という量的な変化が、社会的諸環境の整備の促進や個人のクオリティ・オブ・ライフの向上と、直接につながるはずだという期待や前提が保持されているといえよう。このような量的な変化と環境の整備やクオリティ・オブ・ライフの変化との関係を、正の相関としてこれまでの障害者スポーツ論は素朴に設定していたといえる。だが、必ずしも両者の

関係は正の相関とはならず、むしろ負の相関となっている可能性も否定はできないのである[3]（八十川 2001）。

スポーツに参加する障害者の増加にともない、日常生活においても、メディアにおいても、彼ら／彼女らを目にする機会が増えてきているということができる。身体障害者にかぎらず、たとえば知的発達障害者に関しても、スペシャルオリンピックスのようなイベントを媒介にして「健常者」の耳目を集めるようになったともいえる。そのためスポーツのイベントは、障害者あるいは障害者スポーツに関心を向けさせるという点で、私たちに彼ら／彼女らの存在を認知させ、その理解を深める契機となっていると考えることはできるかもしれない。

だが、ここでは高橋のいうように、第一歩としてスポーツをしている障害者や、その障害のある身体をみることの重要性を認めたうえで、障害者のスポーツをみることが、障害者の理解やノーマライゼーション――社会のあり方についての代替案の提示――の実現の第一歩になりえているのか、という疑問を呈してみたい[4]。このことは、障害者スポーツに関する従来の議論の前提を批判的に捉えなおす作業に繋がっている。

そのため、本稿ではパラリンピックのようなスポーツのイベントを、障害者とその身体が可視化される場として捉える。つまり、障害者スポーツのイベントを、ともすると社会の目から隠されがちな障害者を公の場へ晒す大規模なイベントとして捉える。本稿はこの視角をもとにパラリンピック大会に対するメディア言説の考察を通して、それらの表象あるいは言説が遂行的に達成している状況を明らかにすることを目的とする。

このとき、参照軸となるのが、1970年代以降の日本における障害者の運動である。後述するように、この運動における「差異派[5]」の実践は、障害者の身体に対する健常者社会の「無礼な注目」を集めることを主眼として行われた。「障害者」というカテゴリーの存在をさまざまな方法で顕在化していくことで、健常者中心の社会を批判したのであった。ここでは障害者の運動における「差異派」の実践との対比を通じて、スポーツの実践やイベントを、後に述べる「異化作用」の場として捉えなおしていく必要があることを提起する。

2　作為的無関心と無礼な注目

2.1　青い芝

ノーマライゼーションという言葉の本来の意味を踏まえるならば、1970代を中心に盛り上がりをみせ、現在まで続いている障害者の運動を参照する必要がある。本稿では1970年代以降の運動のなかでも、いわゆる「差異派」と呼ばれた実践を取りあげる。「差異派」の実践として、日本脳性マヒ者協会青い芝の会（以下、青い芝）とドッグレッグス、劇団態変をあげることができる。倉本智明によれば青い芝、ドッグレッグス、劇団態変の運動は差異化をめぐるヘゲモニーを問題にするという点で共通している（倉本 1999）。

ここでは「身体の可視化」という点に焦点を当て、簡単に青い芝とドッグレッグスの運動をみていきたい。もちろん、当時の福祉行政をはじめとする制度の問題や、経済的な問

題、被差別的な状況をめぐって「障害者の運動」は展開されたのであり、ここで「身体」に絞ってその運動を語ることはある種問題の矮小化ともいえる。だが、なぜ「青い芝」が70年代に「過激」な運動を展開していったのかに関する、当事者たちの声や先行する議論を念頭に置くのならば、それが「障害者」の存在から「健常者」の目をそらすことを許さないための活動だったと捉えることができる。その意味で「差異派」の運動は、本稿の視点である「身体の可視化」に焦点を当てたものであったといえるだろう。

まずとりあげるのが、青い芝である。青い芝は日本の70年代の障害者運動を牽引してきた集団であり、徹底的に「健常者と障害者の身体」の問題にこだわった人びとであった。1970年を前後して台頭してくる障害者の運動の新しい波である「障害者解放運動」は、障害をネガティヴなものと捉え、その除去や軽減、矯正の必要性を自明視する考え方や、施設への隔離・収容をもって問題の解決とするような福祉のあり方に異議を申し立てるものであった（立岩 1995：田中 2005）。彼ら／彼女らは社会的障壁を除去することによって、「障害者／健常者」という差異が消滅し、差別のない社会が現出するとみなす障害者運動の主流派を批判する。青い芝は「障壁がなくなったとしても、健常者とは異なるこの身体が残るではないか、この身体を前提とするとき、『同じ人間』『同じ市民』として生きることが、われわれに幸福をもたらすのか」（倉本 1999：220）と提起したのである。

倉本によれば「通常、反差別運動は、財へのアクセスの平等を求め、メインストリームへの参入をはかろうとする。ところが、青い芝の会は、それとまったく逆の道を選択した」（倉本 1999：227）のである。それが青い芝の「行動綱領[6]」に集約されている。そして、以下のように主張する。

> 肉体の差異によって、あるいは精神の在り方によって自己の存在価値を規定されて、その価値判断の下に、差別、抑圧、抹殺される現状に対して、私たちは毅然とした態度で闘いを進めていかなければならない（中略）「健全」に同化しようとすることは「健全者」によって規定されている「障害者」を認めることであり、自己を自ら「本来、あってはならない存在」と規定することではないのだろうか。（横田 1979：119）

この主張は、車椅子によるバスへの強行乗車や施設の占拠闘争のような「過激」な行動として現出した。「極端」な形でなされる問題提起は、当事者からも批判や嫌悪を招くこともあった。だが、この主張は当時の障害者を強く惹きつけもしたのである。青い芝の活動とその理念は、現在における障害者の運動にとっても、また障害者をとりまく問題を考えるうえでも大きな参照軸を提供したといえる。

2.2　ドッグレッグス

青い芝の運動がひとまずの収束にむかったあと、障害者の身体をめぐる問題に焦点を当て、運動を担っている団体として、1991年4月27日に活動を開始した障害者プロレスのドッグレッグスをあげることができる。ドッグレッグスは世田谷ボランティアセンターを拠点にボランティアを続けていた北島行徳を中心に結成されたグループである。北島は障害者

問題の原因の一端が健常者の無関心による無理解にあると考え、関心をもってもらうためには障害者による人前での自己表現の機会が有効だと考えた。だが、その期待はあっさりと裏切られてしまう（北島 1999: 25）。そこで取り入れられたのが障害者同士によるプロレスという試みである。それを北島は次のように述べる。

> 障害者が体を人前にさらし、命懸けで闘う。それは、障害者について思考停止状態になっている健常者たちにとって、理解し難い衝撃を与えるはずだ。これなら、障害者プロレスなら、固定化された障害者やボランティアのイメージを揺り動かすことができるかもしれない。（北島 1999：50）

さらに北島は障害者対健常者というプロレスの試合を行うことで、健常者と障害者が違うという現実を観客にみせつける。倉本のいうように障害者対健常者の試合は「まさしく現実の世界における障害者と健常者の関係の縮図にほかならない。そしてなすすべもなく観客席からそれを眺めている己の位置もまた、現実世界のそれと同じ」（倉本 1999：234）であることをみせつけるものであった。

プロレス団体としてのドッグレッグスが、その活動を通して「異化作用」を狙っていることは次の北島の言葉から明らかである。

> どうしたら同情ではなく、観客に正当に評価されるのだろう。健常者並みに歌や演技に磨きをかければいいのか。いや、そうではない。健常者に近づくのではなく、逆に障害者であることを強調することでこそ、固定化されてしまった障害者観を揺るがすことができるはずだ。（北島 1999：26）

こうしてみれば、青い芝やドッグレッグスの活動は、障害者と健常者の身体の違いを双方に否応なく迫る活動であったといえるだろう。

2.3　作為的無関心と無礼な注目

市野川容孝は自らの介護者としての経験を踏まえ、青い芝の運動を次のように位置づけている。

> 一般社会の「障害者」に対するさまざまな「作為的無関心」を一つ一つ壊していくことだったように思う。それは、裏返して言うと、「作為的無関心」とは対照的な「無礼な注目」（差別的な有徴化ないし注視）を、あえて意図的に見えるようにさせる振る舞いだったと思う。つまり、「作為的無関心」によって、あたかも「障害者」差別が存在しないかのように自らを誤認していく市民社会に対して、差別の現実をはっきり突きつけようとしたと思うのである。（市野川 2001：238-9）

「作為的無関心」は市野川の造語であり、ゴフマンの「儀礼的無関心」に由来している。

市野川によれば、「作為的無関心」とは「儀礼的無関心」よりも、さらに「作為的」なものである。「あえてみない」ことである「作為的無関心」において、マイノリティは不可視化されるという（市野川 2001：234）。その意味で市野川があげている青い芝のみならず、ドッグレッグスというプロレス団体の目指したことも、障害者に対する作為的無関心を貫く健常者に対峙し、「『作為的無関心』によって覆い隠されてきた『無礼な注目』を顕在化させる」（市野川 2001：239）ことだった。

健常者と障害者が出会うとは、お互いの身体に対してお互いが「無礼な注目」をしつつ対峙しあうことだと市野川はいう。それは、北島の行った健常者対障害者という試合に顕著である。障害者と健常者の身体的な違いが、誰の目にもそらすことのできない現実として浮き彫りになる。「障害者と健常者が同じである」と言うことの安易さを観客に突きつけているのである[(7)]。

その一方で、「差異派」としての青い芝やドッグレッグスの活動には、「異化作用」を目指す実践が必然的に抱えてしまう隘路を見出すことができる。つまり、「異化作用」はエスカレートしていかざるをえないこと、また、異化的状況にも人は「慣れて」しまうことである。ドッグレッグスにおいて、健常者対障害者の試合は、はじめてみるものにとっては大きな衝撃を与える。全ての観客が試合を見慣れているわけではない以上、異化戦略の有効性は保持されてはいる。だが、次の試合ではさらなる衝撃的な状況が必要とされる。結果、「異化作用」は次第にエスカレートし、それ自体が目的となってしまう[(8)]。

しかし、困難を抱えながらも「異なること」にこだわること、そこから出発するという視点を、われわれは受け取る必要があるだろう。青い芝とドッグレッグスの実践を参照軸として置き、障害者スポーツという営みを「障害の身体」を可視化する場として捉え返したとき、両者の相違をどのように把握することができるのだろうか。次節ではパラリンピックの表象を中心に以上の点を考察していくこととする。

3　儀礼的関心の回路

われわれの日常において、「障害の身体」をもっとも多く目にする機会が訪れるのがパラリンピックというイベントである。このとき、「障害の身体」は、競技観戦によってだけではなく、メディアによってもわれわれの前に差し出される。それだけに、各種メディアによって障害者スポーツはどのように表象されているのかという点を考える必要がある。

まずは、障害者スポーツを考えるうえで基点となる1964年のパラリンピック東京大会の報道からみていきたい。成功を収めたとされるパラリンピック東京大会だが、オリンピックとは異なり、テレビで放送されたのはNHKによる開会式の模様だけであり、この大会で障害者の身体が登場したのは新聞報道によるところが大きい。第１部と第２部に分かれていた東京大会において、第１部は22カ国390名の選手が参加し、日本からは53名が参加した。第２部では日本から585名と特別招待のドイツ選手７名の592名が参加している。このうち第２部の選手の詳細な記録は残っていないが、１部に出場した日本人選手53名（女子２名を含む）のうち50名の記録は残っている。その50名のうち、入所していない３名を

除くと、17名が国立箱根療養所、14名が各都道府県の労災病院、６名が国立別府病院、同じく６名が国立重度障害センター、３名が身障者更正指導所、１名が国立身体障害センターの所属であった。当時、障害者は施設で生活することが「当たり前」であったことを考えれば、選手のほとんどが施設入所者もしくは「入院患者」であるのは当然ではある。当時の人びとにとっては恐らく「異形」であったはずの障害者の身体が、健常者中心の社会にはじめて登場したのがこの東京大会だったといえる。

このときの新聞に掲載された記事と写真はそれぞれ別のメッセージを伝えている。「栄光あれ！パラリンピック」という見出しの記事には、車椅子に乗った両下肢切断と思われる青年の写真が使用されている。「車椅子で華やかに行進」、「秋晴れ、明るい選手の顔」という見出しの記事は、車椅子で行進する女性の写真が掲載されている。閉会式の記事には「肩を組み、別れ惜しむ。晴れ晴れと笑顔」とあり、和服姿で車椅子に乗るアルゼンチンの女性の写真が掲載されている。パラリンピックが開催された11月の朝日新聞の記事件数は36件あるが、そのうち14件は車椅子使用者であることがはっきりとわかる写真が掲載されている。その14件の記事の写真において、スポーツの場面における身体が掲載されたのはわずか３件、そしてパラリンピックの試合における写真はそのうち２件であり、さらには身体をアップで捉えているのは全体のなかの１件しかない。つまり、パラリンピックの報道は、祝祭的な空間における非日常性という意味づけを与えることで、「障害の身体」が可視化されている場であるパラリンピック東京大会と、健常者社会との連続性を巧妙に回避しているのである。

ここで、パラリンピックや障害者スポーツに、「作為的無関心」から「無礼な注目」へという流れを当てはめてみよう。1964年当時、東京大会に参加していた人びとはそのほとんどが施設の入所者・入院者であったという点で、社会から隠蔽されていたといえる。その意味で当時の彼ら／彼女らはまさに「作為的無関心」の対象であり、存在しない人びとであった。このように考えると、確かにパラリンピック東京大会やその後の全国障害者スポーツ大会の開催など、障害者スポーツの振興は、「障害の身体」あるいは「障害者」というカテゴリーの存在を社会的に認知させたのだといえよう。「障害者」の存在が健常者の社会から不可視化されていたことを踏まえるならば、この点は、障害者スポーツがもたらした大きな前進である。しかしながら、それは「作為的無関心」から「儀礼的無関心」への転換だったといえるのではないだろうか[(9)]。

1996年以降の新聞記事の分析を行った藤田紀昭は、メディアの表象が「障害の身体」からわれわれの目を背けるように構成されていると指摘する。1996年のアトランタ夏季パラリンピック、1998年の長野冬季パラリンピック、2000年のシドニー夏季パラリンピック、2002年のソルトレイクシティ冬季パラリンピックの記事分析から、パラリンピックの写真がもつメッセージを次のように特徴づける（藤田 2002）。

パラリンピックにおける報道もオリンピック同様、スポーツとして報道されており、スポーツのもつスピード感、力強さ、爽やかさ、真剣さが報道されている。ただ、オリンピックを含めたスポーツの報道とパラリンピックの報道で異なるのは、後者では車椅子や義足など一見して障害者のスポーツであることがわかる写真が使われている点である。視覚障

害者や知的障害者の競技において一見して障害者のスポーツとわからない場合は、キャプションによってそれが明示される。「障害者」の「スポーツ」であることが理解される内容によって「『障害者が、スポーツで真剣にがんばっている』こと、そして『がんばったことは報われ、評価される』ことが強烈なメッセージとして発せられている」（藤田 2002：209）。また、障害者のスポーツを象徴する写真では外国人が多く起用され、特に明確な障害の表示が行われている。つまり、障害者であることの厳格なラベリングは外国人に対して行われることが多いのである（藤田 2002）。

さらに、女性のアスリートの記事では直接障害部位がみえにくい車椅子使用者の写真が掲載される。障害部位の露呈という「アブノーマル」な身体を回避することによって、「パラリンピックでは美の基準に対する消極的な支持と強化が行われる。それは美のフレームからはみ出すと思われるものの掲載を回避するという方法」（藤田 2002：211）を用いてなされる。逆に男性選手の場合は、「障害は克服されるべきもの」として描かれる。「男性選手の場合、障害の露出は単純にスティグマを意味するのではない。オリンピックのモットーである『より早く、より高く、より強く』やパラリンピックの目指す『卓越性』がモチーフとなるとき、障害は弱さの象徴ではなく、乗り越えるべき対象とされ、男性性を表現するための手段となる」（藤田 2002：211）という。つまり、ここでもパラリンピック東京大会と同様に、障害者スポーツの報道は、「無礼な注目」ではなく儀礼的無関心を喚起しているのである。

では、新聞ではなく、映像メディアではどうだろうか。以下では、長野パラリンピックの公式ビデオをもとに、そこでどのような表象がなされているかをみていくこととする。『98冬アスリート伝説』と銘打たれたこのビデオは、大会組織委員会が監修し信越放送によって制作され、45分間、総カット数465カットから構成されている。特に日本人選手の「活躍」に焦点を当てながら、長野パラリンピックでの出来事を、時系列に沿ってナレーションと字幕によって説明している。また、長野オリンピック後の準備の様子から開会式の模様、競技の結果を中心に、競技以外での様子も交えながら、長野パラリンピックというイベントを紹介している。このビデオが伝えているのは徹底して「長野パラリンピック」の成功と素晴らしさである。大会の素晴らしさを伝える副次的効果として、「障害者スポーツの素晴らしさ」が謳われている。

このビデオにおいて、「障害があってもがんばっている障害者イメージ」は直接的に表示されることは少ない。むしろ、パラリンピックを「スポーツ」として表象しようとしている。たとえば、ビデオの冒頭（１～２カット）は、「もうひとつのオリンピック、パラリンピック。ハンディとともに自らの限界に挑むパラリンピック」というナレーションからはじまる。また、アイススレッジホッケーの決勝戦の模様を伝えた後の、選手とコーチが抱き合う場面（396カット）と選手同士が抱き合う場面（397カット）には、「パラリンピックはスポーツの祭典なんだと改めて示した、アイススレッジホッケー。特に日本の観戦者の障害者スポーツに対する見方を根本から変えたはずです」とナレーションがつけられている。

一方で、日本選手の「活躍」の要因を個人の努力と才能に帰すことで、そのメダルラッ

シュの背景にあったクラス分けの問題や、用具の変化には触れることがない。それが象徴的に現れるのが、大会５日目のアイススレッジレースにおける土田和歌子選手の場面（185～193カット）である。長野大会のスタート場面の直後に、リレハンメル大会の場面が挿入される。そこで彼女はレース途中でバランスを失い転倒してしまう。ナレーションはその様子を「屈辱しか残らなかった」と語る。次のカットで長野大会の場面に戻り、彼女は圧倒に的な差をつけて優勝する。リレハンメル大会と長野大会の結果の違いをナレーションは、彼女個人の努力と才能に帰することで説明する。ここでいわれる才能とは「天性の関節の柔らかさ」であり、そこから生み出される「しなやかな」走りであり、一漕ぎで６メートルという男子選手並みのスピードのことである。

また、藤田の指摘にあったように、ここでも障害者であることの厳格なラベリングは日本人選手ではなく、外国人選手を対象になされている。もちろん、車椅子を使用していること、義足であること、切断された先がないことなどは、日本人選手であっても映像から排除できるわけではない。だが、日本人選手の障害部位が映されるのは、スレッジやチェアスキーなどの用具と一体化した形であり、いずれも競技中の身体にかぎられているのである。麻痺による車椅子使用者の下半身の細さ、両上肢や両下肢の切断部位など、競技以外の場面で具体的な身体の欠損が映るのは、やはり外国人なのである。

ここでも、障害者の身体の提示に関する日本人選手と外国人選手との差異は存在している。換言すれば、「われわれ」ではない他者に対して障害者の表象を与えることによって、ビデオは、障害の身体に対する「無礼な注目」ではなく、儀礼的無関心を喚起しているのだといえる。ここまでは、新聞報道と変わりはない。だが、映像と記事・写真というメディアの違いは無視してよいものだろうか。この違いに注目すると、公式ビデオが、「障害者」という表象に関して新聞報道とは別の側面を喚起していることがわかる。

このことは、ビデオの冒頭部分と選手宣誓の場面、結末部分において象徴的に現れる。先にもあげたビデオの冒頭、１～２カット目のチェアスキーの滑降とクロスカントリーの場面には、「もうひとつのオリンピック、パラリンピック。ハンディとともに自らの限界に挑むパラリンピック」というナレーションがつけられている。また、会場準備の場面（11～12カット）では、まず11カット目に、「パラリンピックはオリンピックと同じ競技会場を使用することにその主旨があります」とナレーションがつけられている。続く12カット目には先のナレーションと同じ内容が字幕としてあてられている。

これらの説明がなされてから、選手宣誓の場面となる。聖火台に点火された炎のアップ（44カット）から一転して四戸龍英選手が写り、選手宣誓の発話がなされる（45～47カット）。選手宣誓は次のようなものであった。

> 宣誓、われわれパラリンピック冬季競技大会参加の選手一同は、最高峰のレベルで競われたオリンピックと同じ会場で競技できることに感謝し、日々積み上げてきた練習の成果をいかんなく発揮することを誓います。（傍点は筆者）

この場面を具体的にみていこう。「宣誓」は、ナレーション・字幕・BGMのない単独の発

話となっている。「われわれパラリンピック冬季競技大会」の発話には、「選手宣誓はニッポン選手団主将の四戸龍英選手が行いました」というナレーションがつけられている。「参加の選手一同は、最高峰のレベルで競われたオリンピックと同じ会場で競技できることに感謝し」の発話は、再び単独の発話である。「日々積み上げてきた練習の成果をいかんなく発揮することを誓います」の発話には、同内容の字幕が表示されている。

このビデオのなかで、人物の発話が単独で登場する場面は非常に少ない。特にナレーション・字幕・BGMのついていない発話はこの一連の場面のみである。さて、ここでひとつの疑問が生じる。なぜ「障害者」は、オリンピックと同じ会場を使用することに「感謝」しなければならないのかということである。だが、ビデオは選手宣誓の直後に開会式の場面に転換してしまう。そのため、ここで浮かんだ疑問を反復する機会もなくビデオは進行していくのである。

エピローグ部分では、大会を総括する語りとして「アスリートたちは言いました『ひとはみんな一緒です。障害はひとつの個性です』」というナレーションと字幕が現れる（450～451カット）。しかし、ビデオのなかでは、「人は皆一緒であり、障害はひとつの個性」であるという主張は、パラリンピックに参加したアスリートの発話としては示されていない。つまり、あくまでナレーションによる説明として主張されているのである。

ナレーションが提示する枠組みは、制作者から与えられ、メッセージの読み取り方を規定している。ただ、選手宣誓の場面のように、ビデオのなかでも「障害者／健常者」の非対称性が顕在化することがある。これに対して、制作者の言明といえるナレーションは、パラリンピックがスポーツであること、「人はみんな一緒」で「障害は個性だ」という説明を行うこと、ボランティアなどへの言及を行うこと、これらによって非対称性の顕在化を封じている。非対称性への気づきは間違った読みとされ、障害者のスポーツも健常者のスポーツも同じだという意味づけへと回収される。

以上のことから、このビデオではふたつのことがパフォーマティヴに達成されているといえる。ひとつは、「障害の身体」への直接的な注視を避けさせ、障害者スポーツを「スポーツ」としてみさせようとする、主に明示的なメッセージである。それらは競技の映像とナレーション、字幕によって説明される。もうひとつは、反対に「健常者／障害者」カテゴリーの存在を暗示させるものである。このビデオで重要なのは、ふたつのカテゴリーの非対称性のうえに、パラリンピックとは「スポーツ」である、または、「人はみんな一緒」で「障害はひとつの個性」であるというメッセージを重ねていく点にある。このように構成することで、このビデオは、カテゴリーの非対称性を隠蔽しつつ、「障害の身体」の差異の顕在化を、「スポーツ」という文脈内での出来事としてまとめていく。主として達成されるのは、障害者スポーツとパラリンピックを「スポーツ」として考えるという点である。障害部位への注視、パラリンピックそのものが抱える問題は、それぞれ日本人ではない他者や選手個人に問題を帰属することで回避されている[(10)]。

ここでは「儀礼的無関心」ではなく、「儀礼的関心」が構築されているのだ、と考えることができるだろう。儀礼的無関心が「みていないことを装う」振る舞いであるのに対し、儀礼的関心とは「みていることを装う」振る舞いである[(11)]。1964年のパラリンピック東

京大会の報道は、祝祭的な非日常性という文脈にのせることで、障害の身体に対する儀礼的無関心を喚起したと捉えることができた。それに対して、1998年以降の障害者スポーツやパラリンピックの表象は、儀礼的関心を構築したのだといえるだろう。障害者をとりまく諸環境の問題「障害者／健常者」のカテゴリーの非対称性、身体の差異を隠蔽しながらも、「スポーツ」の文脈であることを強調することで、「共生」や「理解」が成り立っているとする。つまり、儀礼的関心の構築とは、障害者スポーツをみることで、「社会的弱者」や「福祉」へ注意を払っている、理解していると錯認させていくことだということができる。

4　おわりに

これまでみてきたように、パラリンピックの表象は、儀礼的関心状況をパフォーマティヴに達成していると考えることができる。これは、パラリンピックをはじめとする障害者スポーツの表象からは、「障害の理解」や「ノーマライゼーション」といった概念を直接的に帰結できるわけではないことを示している。藤田は自らが見出した状況に対し、その解決として次のことを提示する。

> スポーツの場では障害があっても、より速く、より強く、そしてより美しくあること、勝利を目指すことが求められる。そのためには、障害のあるぶん障害のない人以上の努力が必要だ。これにより劣っているとされる能力や美しさといった身体的価値が回復されるのである。しかし、スポーツの世界に支配的な価値、身体に対する価値基準が多様化されない限り、それを満たそうと努力できる人以外のスポーツ参加は阻害される。また、それが可能な人も努力すればするだけ障害のない人との差異が明確化され、障害のない身体よりも「価値の劣る障害のある身体」を認めざるを得なくなる。（藤田 2002：212）

しかしながら、身体の差異が明確化することは、即その身体が「価値が劣る」とはならないはずである。また、単純に「スポーツの世界に支配的な価値」や「身体に対する価値基準」を多様化することは、問題の解決とはならないのではないだろうか。それは障害者の身体を劣ったものとする価値も残されたまま、様々な価値観が並列する状況である。

そのため青い芝やドッグレッグスのように、われわれは障害者と健常者の身体の「違い」を認識し、無礼な注目で対峙することが必要なのであった。現在の障害者スポーツを考えた場合、おそらく、青い芝やドッグレッグスの実践が目指した、「一方的な差異化＝意味化の不当性の告発」（倉本 1999：246）にさえ届いていないのが現状であろう。安易に「共生」や「同じ人間」であることを謳うのではなく、まず「障害者の身体」と「健常者の身体」が違うことを認め、障害者スポーツを「異化作用」の場として捉えなおす必要がある。それによって、障害者スポーツは、「障害の身体」という差異に出会える大きな機会を提供するものになりえるはずである。

しかしながら、藤田のいうように、スポーツにおける価値の多様化を目指すことは、戦略としては現実的であり、現時点で本稿はこれを超える構想は示すことができていないのも確かである。この点を考えていくことが、今後の大きな課題となろう。ただ、障害者スポーツを「固有のスポーツ」と捉える視点から再定位していくことが有効ではないかと考えている。「固有である」とは、対他的な自律性が確保されつつ、あるカテゴリーからは逸脱していないことである。たとえば、車椅子バスケットボールは、他のスポーツとも一般のバスケットボールとも異なる「固有性」をもつ。その一方で、レクリエーションやリハビリテーションではなく、いわゆる「スポーツ」としての形式をも備えている。つまり、障害者スポーツを「健常者」が行うスポーツと同等なものと捉えたうえで、「障害者と健常者の身体」の差異にこだわって記述を行うことを目指すのである。各々のスポーツの「固有性」を論じていくことが、「身体」に「無礼な注目」をしていく契機になる。そのためには、これまで以上に身体の差異やそれぞれのスポーツの形式を、当事者の実践から具体的に記述することが求められていくだろう。

【謝辞】

本稿の執筆にあたり、千葉大学文学部日本文化学科の橋本裕之先生には、お忙しいなか多くの時間を割いて、極めて細部にわたるご指摘とご教示をいただきました。先生のご指導がなければ、この場に私の論文が掲載されることはありませんでした。ここに記して感謝いたします。

【注】

⑴ 「障害者」という用語に関して、現在では「障碍者」や「障がい者」という語を用いることが増えてきている。だが、当事者たち自身が自覚的に「障害者」を用いている場合もあり、その自称カテゴリーを尊重し、本稿では「障害者」を用いる。また、「障害者スポーツ」に関しても、「障害者のスポーツ」や、参加する人にルールを合わせた（adapt）スポーツという意味で「アダプテッド・スポーツ」という語を用いることもある。だが、この用語はいまだ一般的とは言い難い。そのため、本稿では主に「障害者」によって行われているスポーツ活動全般を含んだ語として「障害者スポーツ」を使用する。

⑵ 正確には、東京パラリンピック大会は、第13回国際ストーク・マンデビル車椅子競技大会として第1部が1964年11月８日から12日まで行われ、国内大会として第２部が11月13日、14日に行われた。パラリンピックはストーク・マンデビル競技大会での愛称であり、当時はparaplegia（対麻痺者）のオリンピックという意味でパラリンピックが用いられていた。IPC（国際パラリンピック委員会）がIOC（国際オリンピック委員会）から「パラリンピック」の名称使用を正式に認められたのは1988年のソウルパラリンピック大会からであり、そこから遡ってローマ大会を第1回とし、東京大会は第2回大会とされた。これ以降パラリンピックはparallel＋Olympic（もうひとつのオリンピック）という意味でパラリンピックと呼ばれる。

(3) 負の相関となる場合として、「重度者」の参加が増加した場合、それに対応できる人的・物的環境の未整備によって、スポーツに対する満足が十分にえられないことなどが考えられる。また、障害者スポーツに参加することで個人のクオリティ・オブ・ライフの向上につながるとされている。だが、この用語をどう捉えるかによって想定される事態はまったく異なる。それゆえクオリティ・オブ・ライフをめぐる議論を踏まえ、スポーツとの関係を探る必要がある。

(4) ノーマライゼーションとは、全ての人に通常の生活を送る権利をできるかぎり保障する、という目標を表現したものである。ノーマライズするとは、生活条件のことであって、障害そのものをノーマライズすることではない（花村 1994：155）。また、「ノーマライゼーションは順応や同化を説くものではなく、社会のあり方についての代替案の提示」（立岩 2002：154）であり、具体的には知的発達障害者の施設の問題と密接に関わっている。日本においては国際障害者年をお祭りとして飾る言葉として頻用された。そのためこの言葉は、掛け声、キャッチフレーズにとどまることがしばしばで、法律にしても理念や努力目標を語るにとどまるものでしかないのが現状であるといわれる（立岩 2002：153）。スポーツによってノーマライゼーションが達成されるという議論に対しては、これまでどのような「社会の在り方」の代替案を提示してきたのか、と問い返す作業が必要である。

(5) 「差異派」という用語はフェミニズムの用語から由来している。だが、立岩によればフェミニズムのそれとは「少し（だけ）似ている」。差異派フェミニズムが差異を称揚しようとする方向に行くのに対し、青い芝を筆頭とする障害者の差異派は、「差異に、そしてできないことに『こだわっている』のである」（立岩 1998：218）という。

(6) 青い芝の「行動綱領」は、「われらは自らがCP〔脳性マヒ――引用者注〕者であることを自覚する」、「われらは強烈な自己主張を行う」、「われらは愛と正義を否定する」、「われらは問題解決の路を選ばない」（横田 1979：114）という 4 つの見出しからなる宣言に、「われらは健全者文明を否定する」という項目を加えたもの。そこでは、脳性マヒ者であることそれ自体を肯定しつつ、社会に向けて主張・行動することで社会のあり方についての問題提起がなされている。

(7) 北島の言葉を借りれば、「障害者と健常者は同じと言ってしまえば（中略）違うという現実から目を背けることになる。障害者と健常者の置かれている立場が明らかに違う以上、わかるというのは欺瞞だ」（北島 1999：36）ということになる。こと身体に限っても、「健常者」にとって脊髄損傷によって体幹部の筋肉群――いわゆる腹筋や背筋――が麻痺した状態で日常生活やスポーツをすることを想像するのは困難である。体幹部の筋肉群は意識せず使われており、それを想像できるというのは「健常者」の傲慢であろう。

(8) 倉本によれば青い芝、ドッグレッグス、初期態変の活動は差異化をめぐるヘゲモニーの掌握のうち、「一方的な差異化＝意味化の不当性の告発」でしかない。そのため、ヘゲモニーの掌握には抑圧されたいまひとつの意味の顕在化＝オルタナティブな価値の創造の課題が残されている（倉本 1999：246）。倉本は「対抗的な発想から抜け出し、自

らの表現活動を芸術として位置づけなおすことで、態変は、主体的に意味づけられた差異を障害者身体の上に構築することに成功しつつある」と評価する。そして、「旧来の『差異派』とは異なる、新しい『差異派』の可能性をみてとることができる」（倉本 1999：247）と述べている。劇団態変の実践を踏まえながらも、本稿が記述をドッグレッグスまででとどめているのは、本稿の対象が「障害者スポーツ」だからであり、そのなかでとりうる可能性を模索するためである。

⑼　この「作為的無関心」から「儀礼的無関心」の転換をネガティヴなものではなく、ポジティブに捉えることも可能である。障害者スポーツへの関心が「儀礼的無関心」であっても、障害者スポーツ報道が量的に一層増大することによって、より「無礼な注目」へと接近していく契機になっていると考えるのである。たとえば、Ｊリーグの発足によってサッカー自体への関心が増大したように、である。

⑽　長野の大会ではクラスの統合がなされず、出場選手３人という種目もあった。また、土田選手の使用していたアイススレッジの変化には触れられていない。国ごと、あるいは個人ごとに同じ種目でもスレッジや車椅子の形状が大きく異なるがそれについてもビデオはまったく触れていない。海老原修は「パラリンピックに込められるメタ的メッセージを検討すると、南北問題を隠蔽し、新たな階層化を自明視させない」という点を指摘している。さらに、「パラリンピックは、知的・身体的障害者＝『持たざる人』と健常人＝『持てる人』という意図的な構図を自覚させる」（海老原 2003：69）とも指摘している。

⑾　北田暁大は儀礼的関心という語を使用するにあたり、「儀礼的」に含まれるふたつの意味、「儀式的（ritual）」と「紳士的（civil）」を区別し論じている（北田 2004）。北田の区別によれば、本稿における「みていることを装う」という態度は、「儀式的関心」を指すことになろう。だが、本稿では、無関心を装うという「儀礼的無関心」に対置される概念として、関心があることを装うという「儀礼的関心」の語を用いることとした。

【参考文献】

蘭和真，2002，「障害者スポーツの報道に関する研究――1945年～1999年の朝日新聞の記事分析」『教育医学』47(5)：374-80.

海老原修，2003，「ある身体と持つ身体――パラリンピック考：義足のモーリス・グリーン」海老原修編著『現代スポーツ社会学序説』杏林書院.

藤田紀昭，1999，「スポーツと福祉社会――障害者スポーツをめぐって」井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社.

――――，2002，「障害者スポーツとメディア」橋本純一編『現代メディアスポーツ論』世界思想社.

――――，2004，「オルタナティブな存在としての障害者スポーツ」飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店.

ゴッフマン,E.，1980，丸木恵祐・本名信行訳『ゴッフマンの社会学４集まりの構造――新しい日常行動論を求めて』誠信書房.

花村春樹，1994，『「ノーマリゼーションの父」N.E.バンク-ミケルセン——その生涯と思想』ミネルヴァ書房.
市野川容孝，2001，「『障害者』差別に関する断想——一介助者としての経験から」坪井秀人編『偏見というまなざし——近代日本の感性』青弓社.
北田暁大，2004，「引用学——リファーする／されることの社会学」『〈意味〉への抗い——メディエーションの文化政治学』せりか書房.
北島行徳，1999，『無敵のハンディキャップ——障害者が「プロレスラー」になった日』文藝春秋.
————，2000，『ラブ＆フリーク——ハンディキャップに心惹かれて』文藝春秋.
北野与一，1996，『日本心身障害者体育史』不昧堂.
倉本智明，1997，「未完の〈障害者文化〉——横塚晃一の思想と身体」『社会問題研究』47(1)：67-86.
————，1999，「異形のパラドックス——青い芝・ドッグレッグス・劇団態変」石川准・長瀬修編『障害学への招待——社会、文化、ディスアビリティ』明石書店.
高橋明，2004，『障害者とスポーツ』岩波新書.
田中耕一郎，2005，『障害者運動と価値形成——日英の比較から』現代書館.
立岩真也，1995，「はやく・ゆっくり——自立生活運動の生成と展開」安積順子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『増補改訂版生の技法』藤原書店.
————，1998，「1970年」『現代思想』26(2)：216-33.
————，2002，「ノーマライゼーション」市野川容孝編『生命倫理とは何か』平凡社.
八十川睦子，2001，「障害者スポーツ論の限界に関する一考察」『奈良女子大学スポーツ科学研究』3：31-40.
横田弘，1979，『障害者殺しの思想』JCA出版.
好井裕明，1999，「『施設に暮らす障害者』という埋め込まれたメッセージ——あるTVドキュメンタリーが強制するカテゴリー化の解読」『批判的エスノメソドロジーの語り——差別の日常を読み解く』新曜社.
好井裕明・山田富秋，2000，「『歴史』と『わたし』をへだてゆく語り——映画『東京裁判』のナラティブ・ポリティクス」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知 2 語り：つむぎだす』東京大学出版会.
財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会，1965，『パラリンピック東京大会報告書』財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会.
財団法人日本身体障害者スポーツ協会編，1985，『創立20年史』財団法人日本身体障害者スポーツ協会.
全国自立生活センター協議会編，2001，『自立生活運動と障害文化——当事者からの福祉論』現代書館.

（わたり・ただし　筑波大学大学院人間総合科学研究科在学）